

もっと降り降り

青森市雪国学研究センター主任研究員 山本恭逸

青森で「もっと雪降り」などと言おうものなら、毎年雪に悩まされている多くの市民からひんしゆくを買う、いやそれどころか袋叩きにあうだろう。しかし、それを百も承知の上で、あえて「雪よ！もっと降り降り」と主張したい。

昭和30年代の青森と現在の青森を比較して、第一の驚きは市街地の拡大である。古川中学校・久須志神社より南側は水田地帯で、浪館まではほとんど人手がなかったように記憶している。佃の当たりも明の星短大あたりが住宅地と農地の境界であった。もちろん小柳団地もなかった。昭和35年の青森市の人口は20万2千人、平成12年の人口は29万8千人である。

第二は、モータリゼーションの普及と都市計画道路が整備されたことである。観光通り、国道バイパスなど立派な道路が増え、自動車も増えた。昭和35年の青森県の自動車数は28,675台、このうち半数が貨物車つまりトラックである。平成15年には986,932台に増え、このうち半数が乗用車である。軽自動車を含めると六割以上が乗用車である。

最も変わったのは雪に対処する能力である。つまり雪処理能力である。昭和30年代には、国道など主要幹線道路では機械除雪が行われていたが、生活道路の多くは今日の除雪ではなく、踏み固められたままの状態であった。これが根雪となるのである。毎年、陸軍記念日にあたる3月10日が全市一斉の雪きり日であった。雪きりが春の訪れを告げる青森の風物詩であった。あの雪きりがなくなったのは、一体いつの時からだろうか。



S34.2.17 雪きり作業 合浦公園入口（東奥日報社提供）

住宅の多くは、昭和20年代に急ごしらえで建てられたものが多く、屋根に積もった雪の重みに耐えられるような住宅は少なかったし、屋根から降ろした雪を処理する場所も少なかった。雪処理の道具の主役はスコップと木製の雪かき、そして雪きりにはつるはしであった。

水分の多い青森の雪は、小学生だった自分には動かすのが大変であった。角スコップは重く、やや軽い先の丸いスコップか木製の雪かきを使うのだが、これが木に雪が団子状にくっつき、今日使われているような塩ビ製の雪かきに比べると操作性は天と地ほどの開きがあった。スノーダンプは、鉄道の保線関係で使われていたようだが、一般市民が使うような身近な存在ではなかった。力のある大人は、ベニヤ板のようなものを活用し、スノーダンプのような使い方をしていたように記憶している。

靴も格段の進歩を遂げた。当時は洒落た防寒靴などはなく、長靴以外になかった。雪道を歩いたり、

雪の中で遊ぶと長靴の中に雪が入り、靴の中は濡れ、時に水浸しになる。濡れた長靴は薪ストーブの周りでかわかすのが日課であった。子供の頃、長靴の中が水浸しになるほど濡らし、親から叱られたのは自分だけではなからう。

衣服の進歩は改めて指摘するまでもあるまい。表面は撥水性があり保温力に富む素材の開発が進み、デザインにせよ機能性にせよ昔とは比較にならない。

これだけ雪に対処する能力が飛躍的に向上した。昭和30年代から比較すると格段の進歩を遂げたと言って良いだろう。にもかかわらず、雪に対する市民の不満は尽きない。例えば雪に伴う交通渋滞が指摘される。しかし、あの程度の渋滞は、警察庁の定義では交通渋滞に入らない。旧盆の時期に「東北自動車道矢坂インター渋滞 キロ」という、あれが渋滞である。雪によるのは単なる信号待ちかノロノロ運転なのである。自家用車の便利さに慣れてしまい、ちょっとしたノロノロ運転にイライラしてはいないだろうか。むしろ心が痛むのは、雪で山積みされた歩道を歩けないお年寄りが除雪された車道の脇を歩いての交通事故である。

勤勉な多くの市民は、雪が降るたびに、いつもより早めに家を出る。それは個人としては合理的な行動であっても、みんながそうすれば全体として非合理的な行動になる。道路除雪の障害にもなり、一層の混雑を引き起こすことになる。降雪期にはフレックスタイム制度、あるいはサマータイムとは逆のウインタータイム制といった大胆な時差出勤制度などが必要ではなからうか。

青森市が雪のアイデアを募集したところ、全国から多数の応募があった。その特徴は、雪を白く美しくクリーンイメージでとらえていることである。それを雪国に暮らす苦勞を知らぬと酷評することはたやすい。しかし、私たちは、白くメルヘンチックな世界、羨ましがられる素晴らしい世界を生きているのだという誇りを持ちたいものである。

企画集団ぷりずむ発行 あおもり草子 2000年12月1日号掲載 一部加筆修正

雪きり作業の写真画像は、当該ページに限って東奥日報社が利用許諾したものです。転載並びにこのページへのリンクは固くお断りします。